
独蛾

石鍋 盥回し

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

独蛾

【Zコード】

N4417F

【作者名】

石鍋 盤回し

【あらすじ】

それは一見賢そうに見えて、阿呆な生物だった。その、彼ないし彼女は、阿呆なのだ。そして私も阿呆なのかもしれない。少なくとも、その生物から見た私は、愚かにみえるよつだった。

例えば。

その（人間だとすれば）彼女ないし彼の生物はとてもとても阿呆であつて（もつとも、普段はそれなりに賢いような動きを見せる）、一見こちらには幾ばくかの安心感を抱かせるのである。

例えば。

その（人間だとすれば）彼女ないし彼女の生物は、燃え盛る無人の廃屋を見掛けたら、するりするりと野次馬の隙間をすり抜けて、消防団と消防士の停止もかわし、その必死の業火に駆け込んでいくのだ。それを道楽としている。

そんなものを見た私は、野次馬の背中やら肘やら、時には押し返さんと突き出される掌に鼻つ柱を押し潰されながら不器用に人波を搔き分け（時には鼻血が出るんです）、離せ、放せと騒ぎ立て私の二の腕を掴み静止を促す消防団と消防士の腕を打ち払い（私は私の愚か者さ加減に吐き気がする）、そのとても愚かな生き物を助ける為に、必死の業火に駆け込んでいくのだ。勿論私も愚か者だ。

でも、私はその生物のことが心配だった。

消防団はもとより、消防士達はそうそうに周囲の家を打ち壊して延焼を防いでいる。

後はゆっくり適度な放水で、廃屋の全焼をまつてているのだ。

私は一息ついただけで肺の中も焼け付いてしまひソノで、その生物が危ない目にあつてやしないかと、目を皿のようにして（勿論、目も開けるのが大変な熱波の影響でもあるのですが）その生物を探しますのですよ。

でも、何処にもいない。間違いなく、何処にもいない。

いよいよ廃屋が燃え盛る炎で崩れ始めて、何処にもその生物がいい確信をもつた私はすぐさま、廃屋から脱出を試みるけれども、煙と熱波にやられてふらついて、崩れ落ちてきた材木で大火傷をおつた。

医師にも警察にも消防団にも消防士にも、他のあらゆる人間に様々に叱られるのだ。でも疑問に思うのは、その生物はどうしたのかといつ事で、やっぱり心配だったわけであるわけだ。

手当を受け、戻つたらその生物は食事はまだかと待ち構えていて、話をしたら、炎の中を突つ走り、そのまま直ぐに裏口から逃げたのだとか。

そして、私の火傷を見たその生物がその独特的の言葉でもつて言つてきたのは、要約するとつまりは、要領が悪いな、という嘲りに似たもの。

私はひとしきり、当然、その彼女ないし彼の生物を叱りつけたのだ。

この際、その傷の事等には触れていない。

火傷が癒えてもいないうちに、また火事があつた。

その生物は一見賢くも見える行動をとるし、私の教えや、会話を理解しているような素振りをみせるけれども、阿呆であつて。

また、するりするりと炎の中に突っ走つたのだ。

そして、今度こそ危ないかもしけないと助けに向かうとまた、そこにはいない。真っ直ぐ脱出してるのだ。

そしていつもいつも、私は火傷をおつて帰つていいくわけで（当然叱られる）。

火傷が癒える前に繰り返しその生物はそんな事を繰り返すものだから、私はケロイドだらけで瀕死だ。

でもそれなりに痛いのやら苦しいのやらに耐性があるし、偶然顔はほぼ無傷なものだから、ただ顔は笑つてみせるわけだ。

むしろ、身体中の皮がつっぱるものだから、もはやひきつれた表情しかできないのだ。つまり、それが笑つて見えるのかも知れないとも思う。

いよいよ、次にこんなことがあつたら君は死んでしまうかも知れないといと、医師は言った。

勿論、そんなことを言わぬくてもわかつてます。
笑つて私は返す。

そして、また阿呆な生物は炎に飛び込んだ。

今度こそ私は追わなかつた。

どうせ、直ぐに脱出してるのだ。
いい加減、自己満足でしかない、（出来損ないも甚だしい）自己犠
牲なんて、馬鹿馬鹿しいのだ。

少なくとも、私が思う、その生物を（助けたい）（救いたい）とい
う思いは単なる傲慢であり、その生物からしたら厄介なものであり、
嘲りの対象ですらあつたわけだ。だからこそ自己満足。

私は追わなかつた。

笑つて、その生物の帰還を待つた。

そして、その生物は帰つて来なかつた。

炎で崩れた足場に足をとられ、逃げられなかつたのだ。

熱波と緋色の光のせいで顔が濡れていた。

例えば、世間は笑つていた私を、なじつた。サイワイにも、顔が無
傷だつたものだから、世間は何も知らなかつた。

例えば、ならば死をしてその生物をまた助けに向かつていたなら
ば、私もその生物もそろつて二人とも無事に帰還を果たしたのだろ
うか。

もしくは、二人ともそろつて炎に巻かれて帰らぬことになればよかつたのか？

たつた一度、その生物が無事に帰還すると、『信じた』のが悪かつたのか。

二人ともそろつて生還していたら、その生物は改心したのか？間違っていたのは、私、なのだろうか。

愚かだつたのは。

(後書き)

例えば。例えば。便利なコトバだ。憎たらしくほどに。お付き合
いいただきありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4417f/>

独蛾

2010年11月27日13時53分発行